
THEビッグオーStrikerS

蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THEビッグオーStrikers

【Nコード】

N2431Q

【作者名】

蛇

【あらすじ】

凄腕のネゴシエイターであるロジャー・スミスは謎の声により別世界に飛ばされた。そこで彼は様々な交渉をしていくことになるのであった……ビッグオーをなにかとコラボさせてみたい。そうだ前からやりたかったリリカルなのはとコラボさせよう！という思いつきでできたこの小説、作者は今必死です

プロローグ(前書き)

ついにやってしまった
後悔はしていない

プロローグ

CAST IN THE NAME OF GOD
YE NOT GUILTY

“ 神の名においてこれを鑄造する 汝ら罪なし ”

ここは記憶を失った町、パラダイム・シティ。この住人は40年前に起きた“何か”によって記憶を^{メモリー}全て失っていた

ネゴシエーターであるロジャー・スミスは交渉を終え愛車であるグリフォンに乗り自宅にむかっていた

「（今日の交渉は久々に難しいものだった）」
そんなことを思いながら車を走らせていると突然光がロジャーを包み込んだ

「な、なんだ！」

光の中から声が聞こえる

「あなたに依頼をしたい」

「依頼？交渉の依頼かね？」

「そう。でも少し違う」

「なに？」

「あなたには戦ってほしい」

「……私の仕事は傭兵ではなくネゴシエーションなのだが」

「大丈夫、メガデウスも共に送る」

「なに！なぜ私がビッグオーを動かしていることを知っている！」

「すべては世界が教えてくれる」

その言葉とともにロジャールを閃光が包んだ

ロジャーが目を覚ました時そこはパラダイム・シティではなかった。パラダイム・シティではありえない光景だった。ドームがなく、なによりも人が空を飛んでいるのである

「ここはいいみたい・・・」

ロジャーの別世界での仕事が始まった

プロローグ（後書き）

うまく書けるだろうか？

第1話 機動六課（前書き）

いろいろとおかしいかも

第1話 機動六課

ここは次元世界ミッドチルダ。魔法という文化が存在する世界
ネゴシエイター、ロジャー・スミスは謎の光によりこの世界に飛ば
された。そんなロジャーに嬉しいことが二つあった
一つはパラダイム・シティにあるはずの自宅がなぜか存在したこと。
これにより彼は住居に困ることはなかった
そしてもう一つは……

くくく

「くっ、もう少し爽やかに目覚めたいものだ」
ロジャーがこのミッドチルダにきてから一週間がたった。同時にこ
こミッドチルダでネゴシエイターを始めて一週間になる。このミッ
ドチルダでもネゴシエーションは必要なようだ（ネゴシエーション
以外の依頼も引き受けているからか）評判は中々のものだった

「おや、ロジャー様おはようございます」

「おはようノーマン、朝食の準備はできているかね？」

「はい、いつでも食べられるよう支度はできております」

「おはようロジャー、いい朝ね」

「ああこれで君のピアノがなければ最高なんだがねドロシー」

ロジャーにとって嬉しかったもう一つのことそれはノーマンとドロシー、この二人もいたことである

二人がなぜこのミッドチルダにいるのかドロシーに聞いたところ「よくわからない」、ノーマンは「私はロジャー様のお世話をするだけです」という返答だった。ノーマンはなにか知っているようだったが、これ以上はなにも話してはくれなかった。またロジャーも問い詰めるようなことはしなかった。聞き出したとしてもこの状況をなんとかできるわけではないと思ったのだろうか

「ロジャー、今日も仕事なの？」

「ああ、今日は機動六課という場所に行く予定だ」

「ネゴシエーターなのにネゴシエーション以外の仕事もするのね」

「私だって仕事は選びたいさ。だけどこの世界がそれを許してくれない」

最初ロジャーはネゴシエーションがあまり関係ない仕事は断っていた（女性や老人の依頼は別）。しかし関係ない仕事の量が多すぎたのである。ロジャーは仕方なくそういう仕事を受けることにした

「ロジャー様、スープが冷めてしまいますが」

「ああすまないノーマン。それでは朝食にするとしよう」
ロジャー達は朝食を食べはじめた

ロジャーは愛車のグリフォンで機動六課にむかっていた

「（しかし管理局から依頼がくるとは……）」

ロジャーは管理局という組織を嫌っていた。質量兵器を持つことを禁止しているが彼ら（彼女ら）の使う魔法もロジャーから見れば立派な兵器である。これではまるで意味がない。それにどこかパラダイム社に似た雰囲気を感じる。そんな理由からロジャーは管理局を嫌っていた。今回の依頼も本当は断りたかったが依頼にきたのが女性であったこと、久しぶりのネゴシエーション関係の依頼だったことなどから仕方なく引き受けたのである。

「あそこが機動六課か……」

グリフォンを走らせること数分、ロジャーは機動六課に到着した

「あなたがロジャー・スミスさんですか？」

機動六課に到着したロジャーに一人の女性が近づいてきた

「いかにも、私がロジャー・スミスだ。君は？」

「あ、私はフェイト・T・ハラオウンといいます。では早速ご案内しますね」

「ああ、お願いします」

「あ、ロジャーさん。すんまへんねわざわざ来てもらって」「なにミスはやてのような美しい女性からの依頼だ、これくらいは当然だ」

「そんな美しいなんて……」

「なに謙遜することではないさ。それより依頼のことだが」

「ああそうやったね」

今回ロジャーがつけた依頼。それは質量兵器を不法所持していた疑いのある男に自分が犯人であることを認めさせること。この男が故意に質量兵器を所持していたことはわかっているのだがあと一手が足りない。そこでロジャーにその一手になってもらうことにしたのだ。早速ロジャーはその男の閉じ込められている部屋にはやてと共にむかった

「君がロナルド・プライドかね？」

「……ああそうだよ」

ロナルドはニヤニヤ笑いながら答えた

「では君が質量兵器を不法所持していたことだが」

「なんとも言ってるだろ？俺はたまたま持ってただけだっつうの」

「……」

ロジャーは急に黙り込むと突然部屋をでた

「ど、どないしたん？」

「あの男はただのチンピラだ。交渉する必要はない」

ロジャーはベックという男を思い出していた。パラダイム・シティでドロシーと出会うきっかけを作った男であり何度も自分の邪魔をしてきたチンピラである。ロジャーは彼に「っただけ貸しがあるのだ」がそれはここで語ることはないので黙っておこう

「ああいう男は趣味は悪いが無駄に自信とプライドだけはある。交渉するだけ無駄ということだ」

「それじゃあどうすれば・・・」

その時壁が破壊される音がした

「な、なんや！」

二人が急いで部屋に入るとロナルドがピエロのような巨大なロボットに乗り込もうとしているところだった

「へ！まずはここをぶっ壊してやる」

「ロジャーさん早く逃げてください！」

「君はどうするのだ？」

「ここは私達がなんとかしますので」

「・・・わかった」

ロジャーは外にでることにした

外にでたロジャーは腕時計を口元にもってきて高らかに叫んだ

「ビイイッグオー！シヨオオオタアアアイム！」

「スターズ分隊にライトニング分隊出動を」《ゴゴゴゴゴ》

「な、今度はなんや!？」

《ドガアアン》

地面をわりながら黒い巨人が姿をあらわした

「な、なんなんだあいつは!？俺のロボットじゃねえぞ!？」

巨人は一つの声とともに動き出した

「ビイイッグオー！アアアアクション！」

巨人はゆっくりとロナルドのロボットに近づいていく

「くそう！俺様のロナルドグレートデラックスのほうが強いにきまつてる！」

ロナルドグレートデラックスはビームやミサイルなどを発射し巨人を攻撃する

しかし巨人にはそんなの効いていないようでロナルドグレートデラックスに近づくと連続でパンチをあびせる

「ロナルド！君にはご退場願おう！」

そして空気を圧縮し拳とともに放つ技、サドンインパクトを放った。サドンインパクトをくらったロナルドグレートデラックスは胴体に大きな穴があきそのまま倒れた

「いやーロジャーさん今日はすんまへんでしたな」

「いや私こそあまり役に立てなくてすまなかつたね」

「しかしあの黒いロボットはなんだったんやるなあ。助けてくれたみたいやけど捕まえなきゃならんし」

「捕まえる？」

「あのロボットはどうみても質量兵器やからな捕まえなきゃいけないですよ」

「そうか……」

「それよりロジャーはんのことは気に入りましたわ。よかったら暇なときにも遊びに来て下さい」

「ああ、ありがとう」「この言葉がロジャーをある事件に巻き込むことになるのはロジャーはこのときは思いもよらなかつた」

第1話 機動六課（後書き）

ロジャーに依頼しよう！

あなたが困っていることをロジャー・スミスに解決してもらわないかい？

依頼は感想のほうに！

第2話 追われる者(前書き)

やべーよ、ロジャーまでおかしくなった・・・
どうしようか

第2話 追われる者

ここは次元世界ミッドチルダ。魔法という文化が存在する世界
ネゴシエイター、ロジャー・スミスはロナルド・プライドという男
にたいしビッグオーを使い、ロナルドを『退場』させてから数日が
たった

「ふむ、やはりこちらのほうがいいか？いやこちらも捨て難いな」

「ロジャー、私にはどちらも見えるわ」

「ドロシー、君はわからないのかい？この違いが」

「ええわからないわ」

ロジャーとドロシーの二人は買い物ついでに時計店に立ち寄って
いた。目的はロジャーの趣味である砂時計のためである

「結局両方買うのね」

「なに両方とも安かったから問題はないさ」
砂時計を買い店をでる二人

「あれロジャーさん？」
すると通り掛かった二人の少女のうち青髪の少女のほう話し掛け
てきた

「おやスバルくんじゃないか」

「はい！」

スバルと呼ばれた少女は元気よく返事をする

「ちよつとスバル、知り合いなの？」

「あれ？ティアはロジャーさんに会ったことなかったっけ？」

「そちらのお嬢さんは初めましてだね。私の名前はロジャー・スミス、ネゴシエイターをやっている者だ」

「あ、どうも初めまして。私はティアナ・ランスターといいます」

「ふむ、ティアナくんか。よろしく頼むよ」

「は、はい（紳士みたいな人だなあ）」

「スバルくん達はこんなところで何を？」

「たまには外でお昼を食べようかなと思ひまして」

「ふむ、そうだ。なら二人とも私の家で食べていかないかい？」

「え、でも迷惑じゃ・・・」

「なに食事は大勢で食べるほうが楽しいからね」

「じゃ、じゃあ」

「ちよつとスバル！」

「なに遠慮することはないさ」

「ほらロジャーさんもこう言ってるしさ！」

「……じゃあお言葉に甘えて」

「決まりだね。ノーマン、昼食に二人招くことにした」

『かしこまりましたロジャー様』

「ん？危ない！」

「へっ？きゃあ！」

ロジャーがスバルを抱き抱えながらその場から離れると
《ドゴーン！》

スバルのいた場所になにかがふつてきて辺りを煙がおおっ

「な、なに？」

煙の中から姿をあらわしたのは右手がチェンソーになっている不気味な男であった

「な、なんなのこの人」

「（狙いはスバルくんか・・・）こつちだ！」

「ろ、ロジャーさん？」

ロジャーはスバルの手を握り駆け出した。男がそれを追う

「・・・私達は先に家にいきましょう」

「え？でも」

「気にすることはないわ。ロジャーなら大丈夫だから」
ドロシーはめずらしくロジャーを信用していた

「ハアハアハア！」

ロジャーとスバルは男から必死に逃げていた

「（ロジャーさんだけでも逃がさないと・・・）」
そのときロジャーが急に足を止めた

「ロジャーさん？」

「しまったな、行き止まりだ」

「え？」

逃げる道を間違えたか、二人の目の前は壁だった

「そ、そんな《ガシャ》ひっ！」

後ろを振り向けば男がせまってきていた

「ロジャーさん逃げ」

その時男がはじき飛ばされた

「えっ？」

「乗りましたまえ！」

男はロジャーの愛車、グリフォンによつてはじき飛ばされたのである

「え？え？いつのまに？」

戸惑いながらもスバルはグリフォンに乗り込んだ

「あの、ロジャーさん」

助手席に座っているスバルがロジャーに話しかける

「なんだね？」

「この車、誰があそこまで運転してきたんですか？」
スバルがグリフォンに乗り込んだとき乗っていたのは先に乗り込んだロジャーだけだったのだ

「私だが」

「え！でもロジャーさんはいっしょに逃げていたじゃないですか！」

「この車を動かす方法は一つではないのだよ」

「へ？」

「ふむ、説明は後にしよう。昼食が冷めたら困るからね
いつのまにか車はロジャーの家に到着していた

「ここがロジャーさんの家……大きい」

「そうかね？まあ入りたまえ」

「お、おじゃまします」

「スバル様ですね？ようこそ」

家に入ったロジャー達をノーマンが出迎えた

「ただいまノーマン、ドロシー達はどうしている？」

「ドロシーならお客様と一緒に先に食堂に」

「そうか、では私達も食事にとしよう」

食堂

「スバル！無事だったのね！」

食堂に入るとティアナが駆け寄ってきた

「あ、ティア」

「あ、じゃないわよ！まったくもう・・・」
ティアナはどこかホツとした様子で話す

《グウウウウ》

そのときスバルのお腹が盛大になった

「あ、アハハハハ」

「はあ、あなたは」

「まあ食事にしようじゃないか」

「今日はごちそうさまでした」

「本当は送って行きたいがあいにく二人までしか乗れないものでね。気をつけて帰ってくれ」

「はい！ロジャーさん、今日はありがとうございました！」
六課へ帰っていく二人を心配そうに見るロジャー

「どうかなさいましたか？」

「いや、心配だね。奴の狙いはスバルくんだった、もしかしたら・・・」

「スバル、あんた少しは遠慮しなさいよね」

「だってノーマンさんの料理美味しかったんだもん《ガシャ》え？」
ふと前を見るとさっきの男がいた

「え、なんであいつが」

「ど、どうしよう」

すると男の体が膨れ上がり男は巨大な化け物へと姿を変えた

『オオオオオオオオオオ！』

化け物は触手をスバル達にむかって伸ばした

「キヤア！」

しかし二人を守るかのように地面から巨大な手がでてきてそれを防いだ

「え？」

そのうち全身が地面からでてきた。黒い巨人、ビッグオーである

「あの巨人はあのときの！」

「ビッグオー！アクション！」

ビッグオーがゆっくりと歩きだす。それを阻むかのように化け物は触手でビッグオーの動きを封じる

「くっ、こんなもの！」

ビッグオーは触手をひきちぎり、腹部から大量のミサイルを放つ

『オオオオオオ！』

「女性を付け回し襲った罪、その身で償え！」

ビッグオーは両拳を突き合わせ額のクリスタルからビーム、クロムバスターを放つ

『オオオオ・・・』

それをくらった化け物は消滅だ

地中へと潜っていったビッグオーを見ながらスバルは呟いた

「ロジャーさん？」

第2話 追われる者（後書き）

ロジャーに依頼をしよう！

ただいまロジャーへの依頼を募集中！

依頼は感想のほうに！

第3話 ロジャー・スミス(前書き)

今回も短い

おまけに最後のほうがおかしい

第3話 ロジャー・スミス

スバルは悩んでいた

「あれはロジャーさんだったのかな……」
先日黒い巨人ヒッケオーに助けられたときスバルは巨人からロジャーの声を聞いたのだ

「ロジャーさんがあの巨人を動かしている？でも……決めた！」
スバルは急に立ち上がり部屋からでていく

「スバル？あんたどこに行くのよ」
通り掛かったティアナが質問する

「ちょっとロジャーさんの所に行ってくる！」

ミッドチルダのどこか

「あの巨人、私の作ったバイオロイドを倒すとは。いったい誰がそんなものを作ったのだ？」

巨大なモニターの前に一人の男が座っていた

「まあいい。問題はタイプゼロを逃したことだ。やつがいなければ『計画』は進まない。なんとしても捕まえなければ！」
男はそう叫ぶと立ち上がり部屋をでていった

ここは次元世界ミッドチルダ。魔法という文化が存在する世界

「ふむ、たまには家でのんびりするの悪くないな」
ロジャーはソファアに座りながらコーヒーをたのしんでいた。
そこにノーマンが入ってくる

「ロジャー様。スバル様がお見えになりました」

「スバルくんが？通してくれたまえ」

「承知しました」

少ししてスバルが入ってきた

「こんにちはロジャーさん」

「やあこんにちは。今日はどうしたんだい？」

「あ、いえ、たいした用ではないんですが少し話がしたくて」「話？私とかね？」

「はい。……迷惑でしたか？」

「いやとくに用事はないから大丈夫だよ」

「よかった。じゃあロジャーさんに聞きたいことがあるんです」

「その前にまず座りたまえ」

「あ、はい」

スバルをソファアに座らせる

「で、聞きたいことはなにかね？」

「ロジャーさん。最近あちこちにあらわれる黒い巨人のことが知ってますか？」

「黒い巨人……すまないが知らないね。その黒い巨人がどうかしたのかね？」

「私聞いたんです。その黒い巨人からロジャーさんの声を」

「……私の声？聞き間違いではないのかね？」

「いえ、あれはたしかにロジャーさんの声でした」

「・・・・・・・・」

「ロジャーさん。本当のことを教えてください」
スバルはロジャーにせまる

「・・・・・・・・あなたはいつその声を聞いたの?」「ドロシー?」
いつのまにかロジャーの隣に座っていたドロシーが質問する

「え?えつと、この前この家からティアと一緒に帰ってたときです」
突然の質問に戸惑いながらも答えるスバル

「そう、ならその声は聞き間違いね」

「え!なんでですか?」

「あなたが帰ったあとロジャーならずと家にいたわ」

「ほ、ほんとですかロジャーさん?」

「あ、ああ本当だよ」

「じゃあほんとに聞き間違い?でも、うーん」
考え込むスバル

「おそらく私と似た声の人間が動かしていたのだろう。それで聞き
間違えたのではないのかね?」

「うーん、そうかもしれません。疑っちゃってすみませんロジャー
さん」

「なに気にすることはないぞ」

「じゃあ私はこれで」

「おやもう帰るのかい。夕食でもご馳走しようと思っていたのだが」

「いえ、あんまり遅くなるといけないので……では
そのまま部屋をでていくスバル

「いつてしまったか。せめて送っていかこうと思っていたのだが……
・そうだドロシー、フォローありがとう」

「あなたが捕まっては困るもの。それより、送っていきなれいまか
らいけば間に合つはずよ」

「それもそうだ。では追いかけるとしよう」

ロジャーの家から少し離れた場所。スバルは一人歩いていた

「はあく私の勘違いか」

声がロジャーではなかったことにどこか安心している様子のスバル。

その時であった

「ん？なんの音だろ？」

なにやら足音のようなものが聞こえてきた。その音はゆっくりとスバルのほうへと近づいてくる

「な、なに？」

やがてそれは姿をあらわした。それはたくさんの腕をはやした巨人であった。それは驚きで固まっているスバルにゆっくりと腕をのばしていく

しかし一筋の閃光により阻まれる

「こ、今度はなに！」

スバルが振り返るとそこにはビッグオーが立っていた

ビッグオーはゆっくりと四本腕の巨人に近づいていきその豪腕で殴る巨人はそれをくらい装甲をへこませよける。が、すぐに立ち直りお返しとばかりに連続で殴りつづける

しかしビッグオーはそれをガード、そして巨人が殴るのをやめた瞬間をねらい

「さあ！お別れだ！」

サドンインパクトを放つ

巨人は胴体に大きな穴をあけ倒れた

ビッグオーは巨人が倒れるのを確認すると地下へともぐっていった。ちなみにスバルは騒ぎを聞き付けたのは達がくるまでそこを動けなかったそう

第3話 ロジャー・スミス（後書き）

ロジャーに依頼しよう！

ロジャーへの依頼はまだ募集中だ。君の依頼を待っているぞ！

第4話 ホテル・アグスタ（前書き）

さて今回からある人が登場します

第4話 ホテル・アグスタ

ここは次元世界ミッドチルダ。魔法という文化が存在する世界。今この世界であるオークションがひらかれようとしていた

ロジャーは1つの依頼を受けホテル・アグスタという場所にグリフオンを走らせむかっていた

「（最近は何ゴシエーション以外の仕事が増えてきているな）」
今回の依頼内容は依頼人の代わりにホテル・アグスタで行われるオークションにでてある品を落札してほしいというものであった

「しかしこの品は……」
ロジャーは運転をしながら隣においてある資料をチラリと見る
依頼人が落札してほしい品というのはロストロギアと言われるものに分類されるものだった
ロストロギアとはいわゆる古代文明の遺産であり、現在の技術では再現することができないといわれる代物である。危険なものが多く次元世界を滅ぼしかねないものも存在するという

「（あの女性はなんのためにこれを必要としているのだろうか？）」

ロジャーはグリフォンを走らせながら女性の目的について考えるのだった

ホテル・アグスタに到着したロジャーはホテル・アグスタの中を見て回っていた。すると

「ロジャーさん？」

「む？」

ロジャーが振り向くとそこには見知った顔がいた

「やあ、ミスなのは、ミスフェイトにミスはやても。どうしてここに？」

「私達は警備の仕事です。ロジャーさんは？」

「私は依頼だね」

「ロジャーさんってネゴシエーターですよね？ネゴシエーション関係の依頼なんですか？」

「いや、ネゴシエーション関係の仕事ではないのだが……まあ

今は可能な限り依頼をうけていくことにしているね」「
フェイトの疑問にたいしロジャーは少しどもりながら答える

「ロジャーさんも大変なんやね」

「まあ仕方のないことなんだよ」

はやての言葉にロジャーは苦笑いをつかべながら答えるのであった

S i d e テ イ ア ナ

機動六課には優秀な人や天才が多い

それにくらべ自分は凡人……

でも私は証明してみせる。兄さんの魔法は役立たずではないことを！

オークション開始まであと数時間というときにアラートが鳴り響いた。ガジェットがきたみたいだ
シヤマル先生から送られた戦闘映像をスバルといっしょに見る

「うわゝ副隊長達凄い！」

「あれがリミッター付きの実力……」
やはり凡人はあたしだけ……
その時キャロのデバイスが反応する

「転移魔法来ます！」

目の前に魔法陣が現れそこから複数のガジェットが出現する

「迎撃するわよ！」
とにかく今はやらなきゃ！

S i d e ロジャー

「なんだか妙に騒がしいな」
ロジャーはなのは達と別れ一人探索を続けていた。その時であった

「っおー」

ロジャーの目の前の床を突き破りながらメガデウスが出現した

「馬鹿な！アーキタイプだと!？」

それはロジャーがパラダイム・シティの地下で破壊したはずのアーキタイプであった

S i d e ティアナ

「なに・・・あれ」

私は攻めるためにエリオを下がらせクロスミラージユにカートリッジを4つロードし放った

しかし放ったうちの一発が軌道からそれはスバルにあたりそうになった

だけどそれは床を突き破ってきたなにかにより阻まれた

それはじつとスバルを見ていた

S i d e スバル

「うう・・・」

頭が痛い。床を突き破ってきたそいつは私をじっと見ている。まるで呼びかけている、いや実際呼びかけられていた

「なんで？」

なぜか私にはそいつがなにを言っているのかわかるきがした

S i d e ロジャー

ホテルが崩れていなかロジャーは叫んだ

「ビッグオー！シヨーオオオタイム！」

アーキタイプと同じようにホテルを壊しながらビッグオーは出現した

「ビッグオー！アアアクション！」

ロジャーは手初めにスバルをまだ見つめていたアーキタイプを掴み外へと放り投げる。アーキタイプはホテルの壁を突き破りながら外にでる

しかしすぐに体制をととのえると同じく外にでてきたビッグオーに飛びつく

「悪いがそのてはくわん！」

ビッグオーはカウンターのようにアーキタイプにパンチをきめるパンチをくらったアーキタイプは吹き飛ばす。こんどはすぐに体制をととのえられないようで、中々立ち上がらない。チャンスとばかりにロジャーはミサイルパーティーを使用

ミサイルが当たり苦しんでいるところにロジャーは

「お前がなぜここにいるのかは知らない。だがスバルくん達にてをだすのなら容赦はしない！」

サドニンパクトを放つ。アーキタイプは胴体に大きな穴を開け活動を停止した

ビッグオーを下りたロジャーは瓦礫を見ながら考える

「（なぜあれがここに……）」

その時ロジャーの足元に包帯がおちてくる

「久しぶりだな、ロジャー・スミス」

「!!!!」

そいつは死んだと聞いていた

「なぜだ、なぜここにいる」

見覚えのある包帯

聞き覚えのある声

そいつの名は

「シュバルツ・バルト！」

第4話 ホテル・アグスタ（後書き）

ロジャーに依頼を！

引き続き感想にてロジャーへの依頼を募集しております
皆様どうかよろしくおねがいします

第5話 仲間（前書き）

ほんとは介入させたかったんですけどね
不自然な感じがしたのでこうなりました

第5話 仲間

ここは次元世界ミッドチルダ。魔法という文化が存在する世界。この世界でのシュバルツヴァルトとの再開はなにを意味するのだろうか

ホテル・アグスタでの事件から数日

ロジャーは自分の部屋の机にむかひながら砂時計を作成していた。
しかし中々進まないようだ

「・・・・・・・・」

ロジャーは思い出していた。数日前のシュバルツとの会話を

以下回想

「なぜ私がここにいるのか？それは私が案内人として選ばれたから
さ」

シュバルツは大きく手を広げながら言い放つ

「案内人？どうということだ」

「そのままの意味さ。それに君も選ばれたのだろう？この舞台を盛り上げる交渉人^{ネゴシエイター}として。主人公^{ヒーロー}として！」

「舞台？主人公？どうということだ！」

「『真実』は他人から得るものではない自分で手に入れるものだ
突如地面からビッグオー^{ビッグオー}にた赤い巨人が出現する

「ビッグデュオ・・・だと」

シュバルツは赤い巨人、ビッグデュオに飛び乗る

「探すのだな、真実に近づくための鍵を！」

それだけというとシュバルツはビッグデュオを操り空へと飛んでいった
ロジャーは、ビッグデュオの飛び去っていった方向をじっと見ていた

以上回想

「（シュバルツはまるで全てを知っているかのように話をしていた。
『舞台』この世界が一つの舞台だともいうのか？そして私がその
舞台に招かれた『主人公』？馬鹿馬鹿しい。だが・・・）」
ロジャーは作業をやめ考えはじめ。自分をここに招いた存在、そ
してシュバルツの言葉。ロジャーの中で謎は深まるばかりである

S i d e スバル

機動六課

「うう・・・」

まただ。またこの頭痛だ

あのホテル・アグスタに現れたあの巨人。あれに会ってから毎日のようにおきる頭痛

あの巨人は私を見て『仲間』と言った。そして一緒にくるように呼びかけてきた

それにしても今日の頭痛はいままでよりひどい。まるでまた呼びかけられているようだ
いったいなんなの？

「ちよつとスバル！」

「うえ！な、なにティア」

一緒に特訓をしていたティアが私の顔をのぞきこんでいる

「顔色悪いわよ。無理して一緒にすることないわよ」

「無理してるのはティアもでしょ？大丈夫だから続けよ！」

そう言うって私は特訓を再開した

機動六課近く、水中にそれはいた。長い胴体は電気を運び、時々顔を動かすがとくになにをするわけでもない
ただそれは呼びかけていた。自分と同じ『仲間』に

翌日

ロジャーは機動六課に来ていた

『たまたま』はやてがロジャーが砂時計を作成するのが趣味と知り、自分に作ってくれないかと頼んだのだ。そして完成した砂時計を届けにきたのだ

そして用事を済ませ帰ろうとグリフォンに乗り込んだ、その時だった
水中からそれが現れたのはロジャーはそれを見た瞬間、驚愕した

「あれは、エレクトリックシティの……くっ、ビッグオー、シ
ョータイム！」
ロジャーは急いでビッグオーを呼んだ

S i d e スバル

スバルとティアナはなのはとの模擬戦に挑んでいたが、無茶をした
ためになのはの怒りがあった

「うっ、うう……」

なのはのバインドによって動きを止められているスバルを頭痛が襲
う。そしてそれは水中から姿を現した

「イ、イール」

スバルはなぜかその名前がわかった

イールはゆっくりとスバルへと近づいていく

しかし地面を割り現れたビッグオーによって阻まれた

Sideロジャー

「アーキタイプといい、なぜお前達がいる！」

イールにむかってパンチを放つ

パンチをうけたイールは体制をくずすがすぐに立て直しビッグオーにむけて電撃を放つ

「ぐううう！くっ！」

ロジャーは電撃に耐えながら両目からのレーザー、アークラインを放つ

アークラインをうけたイールは少し怯む。しかしすぐにもちなおし口を大きく開いてビッグオーを飲み込もうとする

「なら、これだ！」

ロジャーはビッグオーの腕部を展開し銃身をだしそこからOセンサーを放つ

Oに見えるハレーションが発生しそれがイールを通り抜けたときイールは爆発した

「またか」

一人の男がモニターを見ながらそうつぶやいた
モニターにはイールとビッグーの戦いが映し出されている

「次の手を考えなくてはな」

第5話 仲間（後書き）

次回も期待しないで待っていてください
最後の部分を少し変えました

第6話 ヴィヴィオ（前書き）

はちやめちやな展開です
読むときはご注意を

第6話 ヴィヴィオ

ここは次元世界ミッドチルダ。魔法という文化が存在する世界
この世界に現れたかつての敵達。これはなにを意味しているのか

めずらしく依頼のない日、ロジャーはソファーに座りながら新聞に
目を通しながらあることを考えていた。シュバルツ、アーキタイプ、
イール。かつてパラダイムシティで戦い、倒してきた敵達。それが
なぜかここ、ミッドチルダに現れた

「（これは私がここに呼ばれたことに関係があるのか？）
そんなことを考えていると部屋にノーマンが入ってきた

「ロジャー様。ロジャー様あてに手紙が届いております」

「手紙？誰からだね？」

「それが名前が書いてないのです」
そう言いながら、厚めの封筒をロジャーに手渡すノーマン

「……たしかにどこにも書いていないな。ゆういつの情報は

私宛ということだけか」

怪しいと思いつながらも封をあけるロジャー。中には地図とパーツの
ようなものが入っていた

「この地図。丸でかこつてある場所があるな。ここに行けとい
うとか？」

「これはなにかの部品のような
ロジャーは少し考え

「怪しすぎるな。捨てたほつがよさそうだな」
すると部品を見ていたノーマンがなにかに気づく

「ロジャー様。その地図、裏に文字がかかれております」

「なに？」

言われて地図の裏を確認するロジャー。裏には一言、来て下さいと
書かれていた

「なぜわざわざ裏に？ふむ……しかたない行ってみるとし
よう。ノーマン。君はその部品がなんなのかを調べておいてくれ」
そう言つてソファアールから立ち上がるロジャー

「わかりましたロジャー様」

「さて、なにが待っているか……」

ロジャーはグリフォンを走らせ地図に印された場所へと到着した

「この辺りのはずだが……」
グリフォンから降り周りを見回していると紙が一枚落ちているのに
気づく

「下へ行け、か。これは私にあてたメッセージと解釈してよさそう
だな。しかし下か……」
ふと前を見ればマンホールの蓋が開いている

「あそこから行けということか。あまり服を汚したくないのだが……」
そう言いながらもマンホールへと入り下へと降りていく
下水道へと降りたつたロジャーはペンライトを取り出し明かりをつ
ける。すると奥からなにかを引きずる音と足音が聞こえてきた

「誰だ！」
姿を現したのは金色の髪をした少女だった

「子供？」
少女はふらふらと歩きながらロジャーへと近づいてきたと思えばパ
タリと倒れ気を失ってしまった
ロジャーは駆け寄り少女を抱き起こす

「息はしているようだな。とりあえず連れて帰るとしよう」

ロジャーは少女を抱え地上へとでた。そのままグリフォンに乗り込み、少女を助手席に寝かせ家へとむかつて走り出した

ロジャー邸

少女を連れ帰ったロジャーは少女を部屋のベッドに寝かせノーマンにスープを作るように頼む。そしてドロシーの様子を見てくれるよう頼み自分は服を変えるため自分の部屋へと入っていった

「う、うう……」

ロジャーが着替えを終え戻ってくると、ちょうど少女が目を覚ました

「気がついたかね」

少女に声をかけるロジャー

「……誰？」

少女は少し警戒しているようだ

「私はロジャー・スミス、君の名前も教えてもらえるかな？」

「……ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオか。少し質問をしてもいいかい？」

「質問？」

「ああ、なぜあんなところにいたのか聞きたい「グウ」……
のだが後回しにするでしょう。ちょっと待っていてくれ」
そう言って部屋をでていくロジャー。部屋にはヴィヴィオとドロシ
ーが残される

「お姉ちゃんの名前は？」

気になるのかドロシーに話しかけるヴィヴィオ

「私はドロシーよ」

「ドロシーお姉ちゃん。お姉ちゃんは「パリーン」え？」

ヴィヴィオの言葉を遮るのように何者かが侵入してきた。侵入者は
ヴィヴィオへと襲い掛かる

「きゃあ！」

すんでのところでドロシーがヴィヴィオを自分のほうへ抱き寄せる

「どうした!」

そこにロジャーが駆け付ける

「おまえは、スバルくん達を襲った!」

侵入者は以前スバル達を襲撃したのとそっくりな姿をしていた
侵入者は邪魔なやつから片付けるつもりなのかロジャーへと襲い掛
かる

ロジャーは侵入者の攻撃を避け侵入者に蹴りをおみまいする。そし
て侵入者の腕を掴み窓の外へと放り投げる

「……ふう。いつたいなにがあつたんだいドロシー」

「よくわからないわ。ただ狙いがヴィヴィオなのは確かよ」

「ヴィヴィオを狙っている？ふむ……」

ヴィヴィオは怯えた様子でドロシーに抱き着いている

そのとき外で羽ばたく音が聞こえた

ロジャーは外の様子を見るため窓から身をのりだす。上空を怪物が飛んでいた。どうやら先程の侵入者が変身した姿のようだ

「まだ諦めていないようだな。なら、することは一つだ！」

そついいながら窓から飛び降りるロジャー

「ビッグオー、ショータイム！」

ビッグオーが地面を割り出現。そのまま落ちるロジャーを中に乗せる

『ロジャー様』

勢いで呼び出したがどう戦うか迷っているとノーマンから通信が入ってくる

「ノーマン。なにかようかね」

『例のパーツなのですがビッグオーに取り付けておきました』

「？なぜだね」

『あのパーツはどうやらメガデウスを飛行させることができるようになるパーツらしいのです』

「ふむ、ナイスタイミングだノーマン。ビッグオー、アクション！」

ロジャーの声と共にビッグオーが空へと浮かび上がる

怪物はビッグオーに体当たりをしかけてくる。ビッグオーはそれを両腕をシールドのように使い防御する

一旦距離をとる怪物

「このっ！」

ロジャーはスイッチを押しモビーディックアンカーを射出する。アンカーは怪物の体に刺さり、怪物をビッグオーへと引き寄せる

「はっ！」

引き寄せた怪物にパンチをくらわせるビッグオー。パンチが数発当たると怪物はアンカーから抜け出し距離を取り口から光線を放ってきた

再び防御の構えを取るビッグオー。光線の量に思うように動けないビッグオー

「くっ、うおおおおお！」

ロジャーは無我夢中といった感じで足元にあらわれたペダルをふむするとビッグオーの装甲がスライドしていき強力な電磁波が放たれる。プラズマギミックである

電磁波はそのまま怪物に当たり怪物をあとかたもなく消した

「では次の質問だ。ヴィヴィオの家族構成を知りたい」
部屋に戻ったロジャーはスープを飲んでご機嫌のヴィヴィオに様々な質問をしていた
そして家族についての質問をすると

「……わかんない」

「わからない？どういうことだね」

「ヴィヴィオ、気がついたら一人だった。だからわかんない」

「ふむ……」

しばらく考え込むロジャー。そして次の瞬間、驚きの言葉を口にする

「なら私が君の家族になろう」

「え？」

とまどうヴィヴィオ

「なに、誰にでも家族はある。君にも家族はあるはずだ。だから私が探し出そう。そして見つかるまでの間私が君の家族になる。不満かね？」

「……うん」

「そうかよかった。ではよろしく頼むよヴィヴィオ」

「うん！よろしくパパ！」

「………パパ？」

きよとんとなるロジャー

「だってロジャーはヴィヴィオの家族なんですよ。だからロジャー
パパ！」

ロジャー的にはお兄さんのような立場を想像していたのだろう。思
わず頭を抱えるロジャー

「よかったわねロジャー。娘ができて」

隣にいたドロシーがロジャーをひやかす。すると

「ドロシーはママね！」

その言葉に目を丸くするドロシー

ニコニコと笑うヴィヴィオ

頭を抱えるロジャー

そんな3人をほほえましそうに眺めるノーマン

そんな光景がしばらく続いていた

第6話 ヴィヴィオ（後書き）

今回から原作から大きくずれます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2431q/>

THEビッグオー-StrikerS

2011年10月11日16時59分発行